

俳句雑誌



空

令和2年11月30日発行

第18巻5号

通巻第93号



2020・11

SORA 93号

三十五句(1)

柴田佐知子

雁や狼煙をつなぐ島の数

冬に入るくろがねのごと僧が坐し

ヨットごと体反らして波越ゆる

引導無用元素となる身もて泳ぎ

島の端に日ざらしの村土用過ぐ

堆肥より村の溽暑がやつてくる

夕立に追ひつかれたる子供たち

涼風や白寿の母に敵は無し

白地着て噂話の圏外に

拾ふ気もひらく気もなき落し文

涼しくて亡き人ひとりづつ招く

発掘調査まづ夏草を切り払ひ

夏草を刈れば前方後円墳

古墳より舟漕ぎ出づる月夜かな

蟋蟀や主も玉も失せし墳

進む気の無きかに峡の盆踊

この世出る人すれ違ふ曼珠沙華



福岡 高倉 和子

山並みの空に張りつく日の盛り

羽抜鶏無敵の貌となりにけり

振り乱すほどの髪なき暑さかな

鰻屋の油に光る洪団扇

負け戦終へたるやうな昼寝覚

冷し酒推されて意見申し上ぐ

それぞれの色とり戻す夕立かな

夜のプール骨やはらかくなつてをり

東京 中田 みなみ

白南風や浜の社の鏡絵馬

十米泳げて母を振り返る

塩噴ける海の漢の麻半被

駐車みな発火寸前天燃ゆる

花壺の洪さに叶ふ蚊帳吊草

朴の蕊葉を打ち弥陀の暮れゆけり

猫じやらし妹くすぐりし径も消ゆ

数珠玉を雀り残して別れけり

長崎 荒井 千佐代

黒々と夏の樅の木一番星

通夜式に迷ひ込みたる病螢

兄逝くや供花の真中の鹿の子百合

聖玻璃へ晩夏の陽射しアニヌス・デイ

朗読台にマスクの我や汗滲み

出棺の天へクラクション黒揚羽

被爆川に沿うて焼場へ夾竹桃

被爆者の兄の納骨浦上忌

埼玉 服部 早苗

せつかちな性はそのまま更衣

ほうたるを放つ消炭色の川

かはせみと云うてそのまま口つぐむ

ステイホーム蚕豆莢にふとりゆく

不特定多数に紛れサングラス

湯の中の麺をどりだす大暑かな

土用芽や納戸に冷ゆる桐箆筒

洗鯉うすく紅はく帰郷かな



北九州 深川淑枝

紙を巻く枕の固き夏の航

船底の畳に眠る青葉どき

夏星へたましひ抜き手切つてゐる

放つ矢のこの世の外へ出て涼し

踏み残す青き雪溪形見とす

蓋のなき石棺茅花流しかな

石棺は舟のかたちやえごの花

面箱に房ある紐や青葉木菟

広島 戸栗末廣

星涼し夜も草いろの山上湖

真つ白き飯炊きあがるみどりの夜

人夕立からくり人形鼓打つ

赤ん坊に好かれてしまふ羽抜鶏

囚人の手作りといふ蠅叩

人の世に人の目をして鴉の子

空いろの水に輪を描くあめんぼう

しみじみと老いて神輿を迎へけり

福岡 角野良生

早苗田にいま胎動の桜島

梅・辣韭これほど漬けてひとりなり

滴りの繋がりかけて繋がらず

ゆつくりと水ふくらみて瀧に入る

さういへばまだ虫知らぬ捕虫網

昇る泡昇らぬ泡や水中花

入道雲天に問へてをりにけり

白々と一と夜の渦や蚊遣り香



福岡 山内 碧

身のどこも痛まぬ朝や今年竹
 麦秋の明るさ果てぬ淋しさよ
 紫蘇を揉むとき亡き母が傍に居る
 夜の薔薇孤独といふは恐ろしき

粕屋 吉田 菫

妬心など無きかに使ふ扇かな
 玉虫や臍の緒遠く置いて来し
 叱られて含羞草みな眠らする
 火を噴きし山の記憶や藪枯らし
 川幅にひかりも曲り曼殊沙華

兵庫 青木 朋子

盛り上がり留守の家守る葉鶏頭
 己のが田のごとく植田を見渡せり
 ねんごろに殺しし蝮埋葬す
 茎細きものは倒れず男梅雨
 卵かけご飯かつこむ梅雨晴間

長崎 松尾 龍之介

夏草の丈そろひたる捨て田かな
 岳人の机上に小石梅雨に入る
 船笛におどろきやすき合歓の花
 桑の実や少年に髭生えそむる
 軽薄の世に天金の書を曝す

直方 曾根 富久恵

盆踊唄果てもなし夜の波
 どつしりと雲の居座る濃紫陽花
 紫陽花や日曜大工は路地に出て
 助手席に猫の骨壺梅雨深し
 産土に土俵のありて夏越かな

糸島 小林 朱夏

己より細き枝にて蝉鳴ける
 隙間なく雨降つてゐる夏野かな
 黒南風や堰板外す力瘤
 鳴き交はす鴉の群や大暑来る
 木に登り天下を取りし日焼の子

福岡 秋津 令

夏帽をもみくちやにして詫びしこと
 梅雨出水田畑は色を失へり
 首晒すごと向日葵の並びをり
 上座へと推されたりけり生身魂
 あの頃の話に戻る円座かな

福岡 永淵 恵子

梨剥いて兄弟喧嘩終はりけり
 螢狩鼻緒のゆるき宿の下駄
 先生にあはず柏手山開
 鰻食べ電球替へて帰りけり
 弟と星座を探す帰省かな



大阪 井上和子

炊きたてのごはんみそ汁終戦日
 村老いて乏しき檀家桐の花
 新しき墓標緑雨をはじきたる
 代掻きの音山峡へ響きたる
 夏雲や泥すぐ乾く耕運機

千葉 原友子

仕掛檻錆びて崩るる草いきれ
 水無月や万年筆の父の文
 畑手入れ済ませし襖はづしけり
 鶏鳴の絶えしふる里昼寝覚
 麦の束抱へし胸の火照りかな

直方 石橋幾代

牛蒡の花先生だけが御存じで
 夕暮の自転車の影麦の秋
 巢立つ日か朝より燕鳴きしきる
 なまくらの鎌研ぎあぐる夏初め
 輪を描いて後みじろがぬ水馬

大野城 森田明成

飛石の一つひとつに水を打つ
 夏出水その川の名の美しき
 路地を掃くハシャツ白し朝ぼらけ
 吾よりも紙魚が親しむ大字典
 夏草のとり囲みたる無人駅

熊本 松田明子

山滴る厩舎廢れて馬具残り
 産土は城の鬼門や夏祓
 鮎解禁竿で水面をなだめけり
 生贄のごと水中へ囀鮎
 出番待つ暗き生簀の囀鮎

北九州 河原敬子

川向かうへお辞儀を返す白日傘
 百穴に百の羅漢やほととぎす
 一村に充つる代田のひかりかな
 足もとの闇恐ろしき螢狩
 白百合や夫の月忌を待ちて切る

粕屋 秋千晴

牛蛙の声伸しかかる日暮かな
 上着着て脱いでまた着て梅雨長し
 兜虫連れて遊びに来てをりぬ
 海開き口の震へが止まらない
 石のごと手足を縮め蟹潜む

太宰府 山本則男

近寄ればすぐに鉏を挙ぐる蟹
 海底の神器を守る平家蟹
 膝の上の念珠重たき瓜封じ
 霊水の光明となり滴りぬ
 木苺を分け合ふことも一会なり



兵庫 大西 乃子

曇りのち晴れしるがねの鱗光る
室生寺へ続く岩道苔の花
窓の外ばかり眺めて夏みかん
お田植の神事白猫素通りす
ざんげするやうに凌霄散りにけり

須恵 苑 実 耶

門も籬も外るる大暑かな
秋草や若き保育士走る走る
秋うらら口笛母に教へをり
問を置いて答ふる母や菊日和
田を刈れば自在に蛙飛び交へり

直方 吉田悦子

堂塔を映し井守の浮かび来し
三楹の花の輝く雨後の山
里親になる約束の目高の子
若かりしちち母に逢ひ昼寝寛
道草を叱られ泣いてソーダ水

兵庫 岩井京子

独り居の母の病や梅雨の雷
親しげに目を合はせくる雀の子
少年が壁へ投球蟻はしる
行き帰り薔薇園抜くるばらのころ
雲海の上におたふく山の頬

兵庫 えとう樹里

猪垣を崩して猪の侵入す
さくらんぼおちよぼ口して笑ひをり
素裸になりたがる子に大夕立
にぎやかに隠し田に来て田植かな
父になる話を父の日に聞きぬ

大阪 田岡千章

合歡の花ひきとめられてもう一夜
薔薇園に総身を浸し憂き心
梅雨菌吾が長所なる痩せ我慢
青梅や躰に拳固なんて嘘
愚直てふ美德なりけり蝸牛

宮崎 田代民子

額のみおしろい叩いてよりマスク
神木に先づは一礼サンガラス
願ひごと多き拍手蟻出づる
強かに優雅にからすうりの花
火口湖と知る由もなきあめんぼう

北海道 押田裕見子

旅寝こそ佳けれと青葉木菟のこゑ
念入りに磨く鍋底夏来る
胸の内のぞき見るかに髪洗ふ
身をうがつ雨に溺るる昼の蝶
真顔なる都市封鎖論聴く酷暑